

第 45 話 (25 頁) ライオンの死

ライオンが年をとってしまい、死がおとずれました。けものたちがみなやってきて、ライオンをとりかこみました。けものたちはおそろしくもあり、気のどくでもあり、みな口をつぐんで立っていました。頭の足りないロバがやってきて、ライオンにつばをかけはじめました。ロバが言いました。

「前はこわかったが、もうこわくない。ぺっぺっぺのぺっ！」

けものたちはロバをつかまえて、ころしてしまいました。

「ロバに『頭の足りない』と修飾語があるように、このロバは愚かしさの象徴だね。」

「全くだ。死を迎えようとしているライオンに、これまでどんなに嫌な目に遭ってきたって、あまりに下品な振る舞いだよ。」

「つばを吐きかけるとは、ひどすぎる。最大の侮辱に近いんじゃないか。」

「フランス語で言うなら、ロバはライオンを vous (あなた) ではなく tu (お前、君) 呼ばわりしている。ぞんざいで、突き放している表現だね。」

「訳の『ぺっぺっぺのぺっ！』も臨場感たっぷりだ。」

「それにしても、なにも殺さなくてもいいのに、と思ったよ。」

「確かに、ロバへの仕打ちもショックだった。『つかまえて、殺してしまいました』で結ばれているから、その感が一層強い。」

「それほどロバはひどいことをした、という印象を際立たせたかったのかな。」

「ところで、ライオンの最期って、もともと強くて敵がいなかっただけに、一層哀れを誘うね。荘厳な感じさえ漂っている。」

「けものたちが集まってきて取り囲んだ、というのはフィクションだけど、物語の 一つの情景として浮かんでくるようだ。」

「おそろしくもあり、気のどくでもあり、…と。けものたちは畏怖の念をもってライオンの悲しみを思いやっていた。」

「このお話には、尊厳死という言葉がふさわしいと、そんな気がしたよ。」